

パイプ
かけむり

パイプのけむりパイプ

パイプのけむり

パイプのけむりパイプのけむりパイプのけむりパイプのけむりパイプのけむりパイプのけむりパイプのけむりパイプのけむり

パイプのけむりパイプのけむ

團 伊 玖 磨

パイプのけむりパイプのけむりパイプ

朝日新聞社

パイプのけむりパイプ

だん い く ま
團 伊玖磨

大正13年4月7日東京生れ。昭和20年
東京音楽学校(芸大)作曲科卒業。以後
作曲ならびに自作の演奏に従事。

作品 歌劇「夕鶴」「ききみみずきん」
「楊貴妃」他、交響曲5曲他、歌曲、
劇音楽等作品多し。

著書 「朝の国・夜の国」「不心得12楽
章」「エスカルゴの歌」。

日本音楽著作権協会出認第401951号

パイプのけむり

昭和40年11月30日第1刷発行

定価 480円

著 者 團 伊玖磨

発行者 朝日新聞社 足田 輝一

印刷所 明善印刷株式会社

発行所 東京 名古屋 朝日新聞社
大阪 北九州

パイプのけむり

もくじ

ハンドバッグ

馬

万年筆

ティップ礼讃

王徳忠

カレー・ライス

色盲

嫌いな言葉

螢

海水浴

お化け

義歯

贗物

雨乞い

低速道路

九官鳥

ソラ・ソラ・シラミ

無情の夢

聖火

デモ

転落

ポケット

赤まむし

ジャパナイズ

無量大数

大蟻食い

黒鯛釣り

大蒜

夕焼け

干支

70

65

60

55

50

45

40

35

30

25

20

15

10

5

152

147

142

137

132

127

123

118

113

107

101

95

89

85

80

75

方角と時刻	157	盲信	241
渡瓶	162	じじばば	245
薄馬鹿時代	167	潮の上	250
傘	171	サン・グラス	255
ガス・ライター	176	北谷の渚	261
宣伝放送	182	戻り駕籠	266
怒りの日	187	米・英のこと	272
昭君	192	鳩	277
暗殺	197	夢	283
またたび	202	年齢	289
長距離電話	207	用語	294
神々の朝	212	平行逆行	299
ヘアー・ピン	221	あぶつてかも	304
サンデー・アフタヌーン	225		
桜と筍	231	あとがき	315
あのですね	236		

題 字 ・ 岡 島 伴 郎
カ ッ ト ・ 吉 沢 家 久
写 真 ・ 朝 日 新 聞 社

ハンドバッグ



39・6・5

ハンドバッグというものは何やら恐ろしいものである。僕は、生まれてこの方、現在四十一歳になるまで、まだその中を見たことがない。

随分長い間、一度そっとその中を覗^{のぞ}きたいものだと思っていた。そして、そうしようとするれば出来る機会はいつでもあった。隣りに寝くたびれている女の枕もとに置いてあるハンドバッグに、寝息を窺^{うかが}いながらそうっと手を伸ばしかけたこともある。ちょっと出て来るから留守番を頼むわね、といって外出した女のアパートに一人座っている退屈まぎれに、ステレオの上に投げ出されて口を半ば開けた鱐^{いわ}皮の一件の中を覗いてやろうかと思ったこ

ともある。女房の簞笥たすの中に幾つも入れてあるいろいろなやつを片っ端から開けてみたら痛快だろうと考えたこともある。しかし、僕はいつもそれを断行しないで終った。断行出来なかったのである。道德的にはなはだ潔癖けつぺきで、他人ひとの持物の中身なんぞを見るなどという賤しいいやことが出来ぬ高邁こうまいなる人格であるがためか、あるいは、単に勇氣がないからなのか？

ともかく、しかし、見たいのである。だが、何故なぜそんなに見たいのだろう？ 何はともあれ、見たくて見たくてどうにも仕様がなないもの、それはハンドバッグの中であって、しかるに、どうしてもそれは恐ろしくて見られないのだからどうにもならぬ。きつと、これは、僕の、一生で果せなかった幾つもの事どもと一緒に成って、死後の墓場の中まで持ちこんで行く妄執もうしやくとなるだろう。僕は、死ぬまで、ハンドバッグの中は見られないと思う。

萩原朔太郎の蛸たこの散文詩を思い出す。

ある水族館の水槽で、長い間、空腹の蛸が飼われていて、人に忘れられたその水槽の濁った水の中で、恐ろしい饑餓のあまり、蛸は、自分の脚をもいで食い、次々に、胴を、内臓を、脳髓を、胃を、すべてを食べて消えてしまう。しかし、蛸は消えてしまっても、死んでしまったのではない。古ぼけた水槽の中には、永遠に、ある物凄い欠乏と不満を持った、人の眼に見えぬ何ものかが生きていた――。

ああ、恐ろしいことである。僕が死んでしまっても、ハンドバッグの中が見たかったという僕の願望は、この世の何処かを妄執となつて彷徨うのだと思うと、全くやり切れぬ。

こんなに妙に女のハンドバッグの中を見たいと焦心するのは、僕だけなのか、あるいは、男は皆そうなのかと、疑問に思つて友人の何人かに訊いて回つてみたのだが、皆、そんなものかね、へへへといつてにやにやるばかりで、はなはだ判然としない。友人達は僕より狡く、利口であつて、どうやら曖昧な態度を示して、本当のことを言わぬのである。

そこで、仕方がないから、一人で、ハンドバッグには通常何が入っているのだろうかを想像してみる。

きっと、コンバクト、ルージュ、人によつてはルージュを唇によく塗るための小さな筆、そして、櫛、鏡（これは多くはコンバクトに付いているらしいが）、お財布、ハンカチーフ？　ちり紙か小型のクリーネックス、香水の小さな瓶を入れている人もいるかも知れず、あ、^{まゆずみ}黛やクリームも入っているかな？　針や糸を入れている用意周到派もいそうだし、定期、回数券、手帳、名刺、電話帳、ペン、身分証明書、小切手、印鑑などを入れている現実派もいそうだ。目薬、ビタミン剤、はては睡眠剤、ガム、仁丹、たばこ、そうなるライターかマッチ、老女は老眼鏡、夏はサングラス。鍵。全く大変だ。ひと財産である。

この間、デパートを歩いていたら、ハンドバッグ売場に、臺口にしては妙に大きく、パ

ッグにしては小さ過ぎるような変な物を売っているので、これは一体何にするのですか、と訊いてみたら、はい、ハンドバッグの中に入れるお化粧品入れてございます。と売子が慇懃に答えたので吃驚した。バッグの中にまたバッグが入るのだから、これではダブル・バッグで、ことによれば、そのまた中に小さな小さなバッグを入れ、そのまた中に小さな小さな小さなバッグを入れているのかも知れず、女というものは、一体何を考え、何をしているのか全く判ったものではない。

その売場で、隣りに、また、妙に大きなハンドバッグを売っていたので、これは随分大きくて、さぞいろいろな物が入るでしょうねといったら、売子は、はあ、これは、靴が二足入るように出来ております。とまたまた慇懃にいうので、こちらは腰を抜かさんばかりに驚愕した。ハンドバッグに靴まで入れるなどということがあろうとは、こちらは全くあずかり知らなかったのである。知らなかったどころか、想像してみたことすらない。こんな大きなバッグでは、夏になれば、コカコーラの半ダースや一ダースぐらいは楽に入れて持ち歩いている女もいるかも知れぬし、硫酸の瓶や、短刀の五、六本を忍ばせている女もあるかも知れぬから、全く油断は許されない。一万円札なら軽く七千万円ぐらいは入るだろう。全く油断は許されぬ。

ずっと前に、何かの洋画で、ディートリッヒだったかバーグマンだったかが、サツとばかりにハンドバッグから黒塗りのピストルを取って構えるシーンがあつて、それが良くて

良くて仕方がなくて、その映画を三度見たことがあった。もともとストーリーに興味があったわけではなく、二度目以後はそのシーンだけを見ただけだから、題名は忘れてしまった。

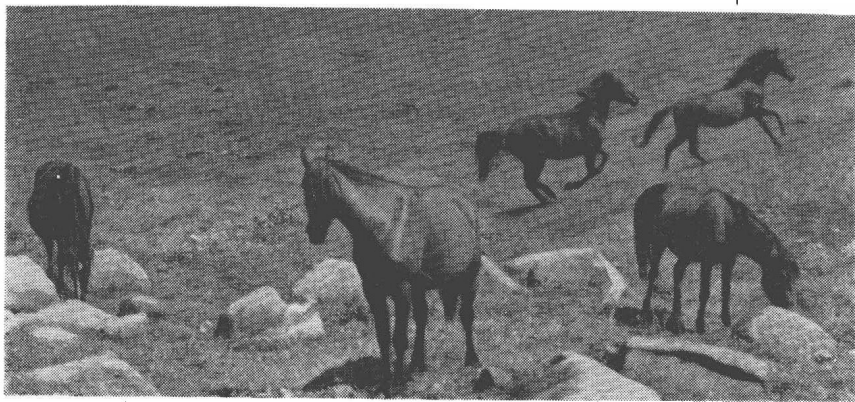
どうも邪推するのだが、ハンドバッグの中というものは、ここだけは男の目の届かぬ女性だけに共通の秘密の空間であるところから、我々男性には想像もつかぬ、怪しい、珍しい、不思議な、秘密の物を女は入れていて、世界中の女同士はそれをお互いに知っていないが、目くばせなどをし合いながら男には隠し、男の知らぬ宝物を、そっとはだ身離さず誰でもがバッグに隠し持っているのではないかと思うのである。そうでもなければ、あんなにいろいろな形やサイズのバッグを作って、高価であるにもめげず、女性がいつもあれをはだ身離さずにぶらさげているわけではない。

こういう邪推を常に心の中に抱えていることが下地になっているからこそ、僕は、女性のハンドバッグの中を、気も狂わんばかりに見たく、また、身の毛もよだつほど見ることに恐ろしいのである。

古事記の鸛鷺草葺不合尊も、夕鶴の与ひようも、オルフォイスも、見ることによって悲劇を招来した。

何もそれほど大袈裟に考えるわけではないにしても、僕は、死ぬまで、きっとハンドバッグの中は見ないだろうと思う。

馬



39・6・12

馬は減ってしまった。減ったなどという言葉よりも、絶滅という表現を使った方が近いほど、馬は減ってしまった。気がついてみたら、いつの間にか東京の街から馬というものがか掻き消すが如く蒸発してしまっているのだから、全く吃驚仰天。馬のためには、いたみ入谷の鬼子母神である。

僕達の子供のころ、たった三十年ばかり前には、馬は東京の街の至るところにいた。荷車を曳き、兵隊さんに乗せ、馬は街のどこにでもいて、ポッカポッカと歩き、パカパカパカパカと行列して走ったりしていた。

僕は子供のころ原宿で育った。そ

の頃の原宿や千駄ヶ谷には、薯烟や水車などがまだ残っていて、ところどころに梢を空に張っている櫓や檣の屋敷林が、いかにもこのあたりが武蔵野の南限であることを物語っていた。小鰯の泳ぐ小川もあったし、狐や狸が出た話も聞いた。そうした武蔵野の情景の中にあつたわが家の屋根に登ると、一面の畑と緑の遙か彼方に、建ったばかりの伊勢丹のビルがぽつんと一つだけ小さく見え、その遙か左手の方に、淀橋のガスタンクが、これまたぽつんと小さく霞んでいた。『変る新宿あの武蔵野の、月もデパートの上に出る』という歌が流行したころのことである。

うちの隣りは、牟田口さんという軍人の家であつた。小さな泥の道を隔てて続いている牟田口さんの塀のあたりは、そのあたりの屋敷林の陰になっているせいか、いつも少し暗くて、蝸牛がたくさんいた。ことにその塀の中段にあつた、いつも閉めてある木の門には春から秋にかけては必ず四、五匹の蝸牛が這っていて、小さかった僕と妹とは、その蝸牛を獲りに行くのが楽しみだつた。

朝になるとその門は開いた。そして、聯隊に出勤する主人を乗せるために、馬丁が曳いて来た馬が繫がれるのだった。僕はその時刻を知っていて、台所から人參を持って行つてはその馬にやつた。馬のそばに行くのは何となく怖かつたが、美味そうに人參を食べる大きな動物を見るのが楽しかつた。朝の光の中で、黒い長靴をはいた馬丁さんに、馬のうしろは歩いてはいけないなどということを僕は習つた。そして、やがて門から出て来て、僕が人參をやつた馬に跨つて出動して行く牟田口少佐の姿が、子供心にピカピカと立派だつ

た。

その後、牟田口さんは引越し、櫻や檜の林も伐り倒されて、そのあたりは渋谷から新宿に抜ける大きな道路になった。そして、蝸牛の這っていた門のあたりには、陽のかんかん当たるアスファルトの上に、千駄ヶ谷小学校前というバス停の標識が立った。

牟田口さんの名前を再び聞くようになったのは、それから十年以上経った、戦争も酷いところであった。牟田口さんは中將になっていた。そして、牟田口部隊はアジアの方々を転戦していた。僕は、子供のころの縁があるので、牟田口部隊のことが新聞に出る度に、その記事をそれとなく繰り返して読んだ。新聞紙と僕の間を、蝸牛の這っていた門と、馬と、人參の遠い記憶が、武蔵野の朝の光の思い出とともに横切って行った。

戦争中、馬は華やかだった。愛馬行進曲という歌が出来たりして、皆それを歌ったりしていた。

昭和二十年の四月十三日の夜、東京に大空襲があった。陸軍戸山学校軍楽隊の鼓手であった僕は、炎上する兵舎の火の手を消すべく奮闘していたが、とうとう炎と煙に巻かれ、塀を乗り越えて街に脱走した。降りそそぐ火の粉の中に塀を乗り越える時に、戸山ヶ原中が焼夷弾の炸裂音と煙と火の海と化し、隣りの東部第四部隊の兵舎と、第一陸軍病院の病棟が幾棟も同時に、吹上げる炎の竜巻の中に轟然と焼け落ちて行くのを僕は見た。

塀を飛降りた僕は、怖ろしかった。火に狂った馬の大群の中に迷いこんだのである。隣りの東部第四部隊の燃える厩舎から逃げ出した数百頭の軍馬は、悪魔の饗宴のように燃え上がる紅蓮の炎をバックに、道路を狂い回っていた。あるいは立上がり、蹴り合い、悲鳴を上げ、泡を吹きながら走り回る狂気の動物の群れの中に巻込まれた僕は、怖ろしさのあまり、叫び声を上げながら地面に倒れた。恐怖の地響きと不吉な黒と紅との拷問の中に、脳裡を、馬は人を踏まないのだという考えが一瞬走って消えた。頭を抱え、足を縮めてうずくまっている僕を飛越え、取巻いて狂い回る、炎に光る蹄鉄と、数百本の脚のシルエットを透して、僕は、遠く早稲田の方の空が一段と紅く燃え上がるのを見た。

僕の、東京での馬の印象は、この怖ろしい思い出で終る。

日本に軍人のいない新しい時代がやって来て、東京の街にそれまではたくさん見かけた軍馬というものがまず消えて行った。輸送はトラックやオート三輪に替り、荷車を曳いている馬の姿も消えて行った。馬耕もモーター付きの耕耨機に替り、田舎にも馬の姿は減った。

今は、ごくたまに見かける騎馬巡査と、宮中に外国使臣を乗せて走る馬車と、そして競馬の馬しか東京では目に入らない。あるいは、特殊な所、たとえば馬事公苑にでも行けば馬はたくさんいるのかもしれないが、前を通ったことがあるだけで、中に入ったことがないから、どうなのかわからない。

僕は、仕事場を八丈島に持っているので、しばしば八丈に通うが、あの島には、牛は多いが馬がない。そこで、小学生に馬の説明するのに、まず大きさから説明しなくてはならないので大変です、と学校の先生が言っていた。今に東京の子供達も、馬というものは、テレビジョンの西部劇にだけ出て来る不思議な動物だと思うようになるかもしれない。こころみに、うちの小学校三年生の子供に訊いてみた。

「馬は何度ぐらい見たことがあるかい？」

「本物は九回見たことがあるよ」

子供はすまして答えた。

馬がこうも減ってしまったという現象は、何となく寂しいような気もするが、軍馬などというものは、馬のためにも、人のためにも、いない方が良いのだろう。

時代の流れは、いろいろな現象を生むものだと思う。